

メディア文化論⑧『ポストモダンのメディア論』への覚書き

水野博介*

<目次>

- 1 はじめに
- 2 「ポストモダン」という言葉の使用法について
- 3 「ポストモダン」という言葉が示す時期について
- 4 「ポストモダン」の“切断”的な特徴
- 5 「大きな物語の喪失」
- 6 「階層性からネットワーク性への変化」
- 7 「権力や権威の優位性の減少」
- 8 「行動の巧妙な監視とコントロール」
- 9 「自我と主体性のあり方の変化」
- 10 「リアリティの変質」
- 11 「シミュラークルの優位」
- 12 まとめ

1 はじめに

この小論は、筆者による単著『ポストモダンのメディア論』（未刊）を執筆するにあたって、中心となる考え（アイデア）の骨子をあらかじめまとめおくものである。わざわざこのようなまとめを作っておく理由は、頁数が多く、さまざまなトピックをバランスよく扱おうとする著書においては、中心的なアイデアそのものは抽象的に述べられ、その応用例が分散的に示される結果、筆者の考え方があまり明確にな

らない危惧があるからである。また、筆者自身が、分厚い著書の執筆のなかで方向性を見失う可能性があり、そのための指針を明確に作っておきたいという理由もある。

そのようなわけで、ここでは『ポストモダンのメディア論』の中心的な考えを、トピックとの関連をあまり考えず、できるだけ自由に敷衍して示したいと思う。但し、メモ的で簡略な記述になっているところが多い。

もちろん、この小論には、著書の完成に向けて自らのモチベーションを強めるという付帯的な理由もある。

2 「ポストモダン」という言葉の使用法について

「ポストモダン」という言葉は、さまざまな分野でさまざまに使用されており、統一的な定義というようなものはないようである。

字義的には、「脱近代」あるいは「近代の後」という意味であり、「近代（モダン）」という時期自体を明確化しないといけませんが、「ポストモダン」には、モダンとは明確に異なる、はっきり“切断”的な特徴が必要になるであろう。以下では、敢えてそのような特徴について述べる。

多くの論者は、「ポストモダン」というような断定的な言葉を避けようとしている。代わりに「近代（モダン）後期」と言ったり、モダンという言葉すら入らない言葉（例えば「リキッド社会」「個人化社会」など）を使っている（しかしながら、事実上は、「ポストモダン」と同じ時期や社会や文化の変化のことを言っている）。

* みずの・ひろすけ
埼玉大学教養学部教授、メディア論

また、「ポストモダン」という言葉を否定する、あるいは限定するような見方もあるが、モダニティ（近代的な行き方）の「行きづまり」とそこから脱却という面を強調するには、「ポストモダン」という言葉は有効かもしれない。

ここでは、この言葉をめぐって、いろいろ書かれてきたこと（のごく一部かもしれないが）を踏まえたくて、この語についての筆者なりの使用法を明らかにしたい。

3 「ポストモダン」という言葉が示す時期について

ここでは、「ポストモダン」という言葉がもつ歴史性や社会的あるいは経済的な背景についてまとめておく。

現代アメリカ文化・文学研究者の麻生享志 [タダシ] によるまとめによれば、「実のところ、「ポストモダン」という語はすでにモダニズム以前から使われていた」（麻生 2011 年、13 頁）のであり、その最初の用例は 19 世紀後半のイギリスで「ポスト印象主義の画風」に関してなされた呼称にまで遡るとする（同）。麻生は、20 世紀に入ってからは、この語が神学や歴史学あるいは建築学などでも用いられ、「一様にモダニズム的近代によって失われた精神性や人間性の回復を目指した点が興味深い」（麻生同書、14 頁）と指摘する。それに比べて、文学の分野ではこの語の受容はなかなかされなかったが、批評家のジョン・バース（John Barth）は、特に 1960 年代後半から 70 年代において「「ポストモダニズム」という語は現代小説に関する用語として広く普及した」（麻生同書、15 頁）とする。

しかしながら、麻生は、アメリカの批評家のなかにも、“社会学的な視点”から「歴史的時代区分としての「ポストモダン」という概念に疑

問」を提示したジム・マグウィガン（Jim McGuigan）という人がいたことも紹介している。麻生によれば、「マグウィガンは「ポストモダニズムの著書においては、社会的変容に触れられることはめったになく、文化的なものや、とくにテキスト的なものが強調され、社会的なものは文化的なものに含まれる」という主張がときおり補足的に加えられる」と述べ、ポストモダニズム批評における歴史の軽視を批判する」（麻生同書、12 頁）。

日本でこの用語に脚光が浴びせられたのは、アカデミズムの世界においてであった。現代フランス思想を紹介した浅田彰の『構造と力』（1983 年）の出版が一つの刺激となって、1980 年代短期間ではあるが“ポストモダン思想ブーム”とでも言うべき状況が生じた。このブームについては、1980 年代の日本社会における「消費社会化」が背景にあるとされる。ちょうど「バブル経済」がもたらされるに至る時期に重なる。

その後、経済は、国民国家という近代の枠を大きく超え、グローバル化が進むなど、新たな「帝国」（ネグリ&ハート、2003 年）の支配という、まさにポストモダニックな状況が生じ、現在に至っている。

4 「ポストモダン」の“切断”的な特徴

「ポストモダン」期がもっている、「モダン」期とは明確に異なる“切断”的な特徴をここに列挙してみる。

- ・「大きな物語の喪失」
- ・「階層性からネットワーク性への変化」
- ・「権力や権威の優位性の減少」
- ・「行動の巧妙な監視とコントロール」
- ・「自我と主体性のあり方の変化」
- ・「リアリティの変質」
- ・「シミュラクルの優位」

以下、これらの特徴についてコメントする。必ずしも肯定的・受容的には論じない。

これらの特徴は、「ネット社会」の到来によって、より明確になりつつある。

5 「大きな物語の喪失」

これは、リオタールが述べたことで有名である（リオタール 1986 年）。そもそも「大きな物語」とは何か？それは、近代の西洋社会を動かして来た大きな価値観あるいは目標設定と言えよう。具体的にいくつか挙げてみよう。

一つは、「啓蒙」という目標である。このことは、「知識（あるいは情報）の優位性」を基盤とすると言えよう。また、「啓蒙」によってくびきから「解放」し、人びとを「自由」にする、ということが二つ目の目標となる。普遍的な価値としての「言論の自由」などもこれに関連していると言えよう。三つ目は、その具体的な形として、人間がより解放された社会として構想された「社会主義（あるいは共産主義）社会」の実現を挙げることができる。

他にも、「豊かな社会」の実現を目標に挙げることができる。具体的には、第二次世界大戦後の日本において池田内閣の「所得倍増計画」などを刺激として生じた「高度経済成長」である。現在の日本においても、しばしば「経済成長」が目標として挙げられることがあるが、一応の「豊かな社会」を実現してしまっただけでは、相対的な貧困層は多いとは言われるが、「経済成長」はまさに“名目”の、掛け声だけの目標にしかならない。

今日は、多数の人びとにとっての“共通”目標を目指し、そのために「組織」を作ったり、「団結」というよりは、「個々人」がそれぞれの「小さな物語」を生き、他者ともゆるやかに「ネットワーク」を形成する時代なのである

う。もはや「マス（大衆）」の時代ではないとも言える。

6 「階層性からネットワーク性への変化」

これには、「組織内」構造に関する議論と、「組織間」の構造に関する議論の二つがある（混同されているように思われる場合もある＝若林 2009 年の議論）。後者は、「インフラ」の構造とも言えよう。

「組織内」構造に関しては、マックス・ヴェーバーが詳細に分析したところの、近代に典型的な「官僚制」（ヴェーバー邦訳 1987 年）に代表される「階層性」と、20 世紀の後半に現れてきたところの、人びとがゆるやかにつながる「ネットワーク性」がある。

「階層性」は、頂点に立つ者と底辺の者たちの間では、その権限に大きな違いがあり、底辺などから上方に向かって「情報」が集約されていき、逆に、頂点から下方に向かって「指令（命令）」がなされると言えよう。その代表である「官僚制」は、古代にも存在していたが、ヴェーバーが言うように、近代に入って“完成”した制度になった。しかし、この「官僚制」は、ひとり実際の官僚組織だけにあてはまるものではなく、いわゆる「大企業」にもあてはまる。何か明確な目標を達成するために、物質的および人的な資源を効率よく動員するのに、規律正しい「官僚制」は合致している。つまり、“目的合理的”なのである。

例えば、近代の大企業の典型である「鉄道会社」は、まさに「官僚制」的な組織であるが、それは無数の列車を時刻表通りスムーズに走らせる必要から、そうなっているのである。しかしながら、かつての国鉄（日本国有鉄道、民営化によって JR 各社になった）は、窓口の対応まで“官僚的”で冷たいと不評だった。

「ネットワーク」は、対等で水平的な関係の結びつきであり、1970年代にカリフォルニアで盛んになった反体制的な「ネットワーキング運動」が興隆のきっかけとなったものである。

「組織内」構造としての「ネットワーク」は、ゆるやかな人びとのつながりであって、何かきちんとした自明の目標を達成するというよりも、柔軟にアイデアを出して、これまででない「問題」の「解決」を目指すというような目的に合致している。例えば、「プロジェクト型組織編成では、組織内部を流動的に再編成できるようにネットワーク化が図られている」(若林2009年、12頁)という。

それに対して、「組織間」の「ネットワーク」的なつながりというのは、かつての日本の製造業に典型的であった「親会社」と「下請け」との関係のように、“上下”の関係ではあるが、安定的で永続的な関係(日本的「談合」も含まれる)ではない。むしろ、「対等」ではあるが“競争”的であり、ケース毎に関係が結べたり結べなかったりするるのである。

7 「権力や権威の優位性の減少」

ポストモダンにおける主流の組織が、“中央集権的”な「階層性」から“対等”な「ネットワーク性」へと移るということは、かつて“上下”の階層の頂点にあつて“強大”な「権力」あるいは「権威」を誇っていた存在の優位性が減少したことを意味する。

また、思想や人や物の配列を考えても、階層的な「体系」は重んじられなくなり、フラットな配列や、コンピュータを用いる検索を前提とした雑多な配置で問題はなくなる。

あるいは「ネットワーク」においては、「リーダー」が一人に決まらない場合がある(多頭制)。リーダーが複数になれば、必然的に個々の「権

力」あるいは「権威」の優位レベルが低下するのであろう。それとともに、従来は権力や権威に近づけなかった階層もそれらに近づけるチャンスが増加する。全体として「ネットワーク」の主流化とともに「権力や権威」も“分散”するのである。

8 「行動の巧妙な監視とコントロール」

かつては、“強大”な権力が、あからさまな「プロパガンダ」によって言論を統制しようとしたが、これは、プロパガンダのターゲットのもつ“強固な”自我と、プロパガンダの手段であるマスメディアの“強力効果”を前提としていた。しかしながら、後者の想定は実際には正しくなかった。現実には、人々の意見や態度を言論で大きく変えさせることは、なかなか難しいことが、アメリカ大統領選におけるキャンペーン研究などによってわかってきたのである。

つまり、人びとは、基本的に自分の意見や態度を大きく変えることを潔しとはしない傾向がある。むしろ、すでに持っている意見や態度を“気づかせる”，あるいはそれらを“強化”することの方がずっと簡単なのである。

このようなことを直感的に理解し、その理解にもとづいて、“より巧妙な”「プロパガンダ」を試みたのが、アドルフ・ヒットラーの片腕として、宣伝・啓蒙大臣でもあつた「大衆操作の天才」と言われるヨーゼフ・ゲッベルスである。彼は、「記録映画」のような、あからさまなプロパガンダはあまり効果的でなく、「劇映画」のなかに、例えば“反ユダヤ”的なメッセージをひそかに忍び込ませるというやり方で、ドイツの多くの人びとがもともと持っていた“反ユダヤ”的な意見や態度を巧妙に“強化”し、人びとがナチスの「ユダヤ人絶滅計画」を支持するように仕向けたのである。

ファシズムが倒れて第二次世界大戦が終わり、次の冷戦期を経て、ポストモダン期になると、ドゥルーズ（1996年）が言うところの「管理社会」が出現する。これは、「訓練を通じて不断に規律化されていく「規律社会」とは異なり、データによって個人が管理される社会である」（これは鈴木謙介による要約である。鈴木2005年、71頁）。

鈴木謙介の要約によれば、「[フーコー的な]規律社会の監視が、学校—工場—監獄における規律化を通して、特に労働者を生みだしていくプロセスだとすれば、[ドゥルーズ的な]管理社会のそれは、「消費者」の創造にかかわる」（同）ものであり、管理社会においては、「個人情報」のデータベースがいたるところに存在しており、その場面に応じた個人認証を要求する」（鈴木同書、72頁）という。このように、ポストモダンにおいては、「データベース」が非常に整備され、その社会的な意義が拡大する。

しかし、それだけでなく、「自我」との関係でも、自我の意識それ自体よりも、自己についての「データベース」の方が「優位」な位置を占めるという現象が生じると鈴木は言う。そもそも個人情報の「データベース」という発想は、「監視」への動機から来ているであろう。特定の個人あるいは集団の「行動」をコントロールするためには、その個人あるいは集団の「行動」のパターンを知らないといけない。そのためには「行動」を「監視」しなければいけないわけだが、実際には、追跡や監視カメラ等によって、当該の「行動」それ自体を監視する必要はない。行動それ自体ではなく、その行動の「データ」を得ればよいわけで、そのような「監視の手段が電子化」（鈴木、70頁。但し、これはライアンの説＝2002年の要約である）した結果、データの蓄積によって「データベース」が構築されないといけないわけである。

これが、まさに、ドゥルーズが言うところの「管理社会」の実現である。

9 「自我と主体性のあり方の変化」

近代人の「自我」のあり方の典型は、デカルトの“我思う、故に我あり”であろう。ここにおいては、“唯一絶対的”な「自我」の存在を自己の存立基盤とするという思想がある。このことに呼応して、一人の著作者が一貫した視点をもって「小説」を著したり、体系的な思想をつくりあげる、ということが行なわれてきた。「個人主義」の浸透とも言える。

それに対して、ポストモダン思想では、「自我」は“分裂”しているとされる。

以上のような近代的な人間とポストモダンの人間では、全く人間像が異なっているかのように見える。しかしながら、わずかに数百年で人間が本質的な点で変化してしまったとは考えにくい。ひとりの人間の「一貫性」と「分裂性」（むしろ、「柔軟性」か？）という両面性は、もともとの人間がもっている性質であろう。つまり、ある人間Aは、どの時点でみても、全体的には人間Aであることに変わりはない。しかしながら、細かくみても、何らかの状況の変化によって、人間Aは異なる側面を他者に対してみせているということがある。例えば、人間Aは、ある状況においてはA'であったり、別な状況ではA''であったりするのだ。これは、具体的には、人間がある状況で緊張のため、いつもとは違うパフォーマンスを否応なくしてしまうということもあるし、素敵な異性に会って自分を意図的によく見せようとする、ということもありうる。社会学者のゴフマンが述べたことをメイロウィッツ（2003年）が敷衍しているように、人間は状況に応じて、異なるパフォーマンスをするわけで、そのことによって、同じ人

間が状況によっては全く別人に見えることもあるのだ。

ポストモダン状況においては、自我の異なる側面を提示することに寛容になったというよりは、自己表現を行える「状況」が多様になった、というふう考えた方がよいであろう。例えば、リアルな社会現実のなかではうまく自己表現ができず、地味な存在にとどまっている（例えば職場や学校で目立たない）人が、ネットの世界においては、ブログや動画投稿サイトのなかで豊かな自己表現をしている姿を提示することが可能である。

確立された強い自我をもった「個人」よりも、カメレオンのように状況に合わせて柔軟で常に変化するような自我をもつ人間は、「個人」としての「主体性」を失っている。強く個を“自己主張”をすることもない。そうすると、芸術的あるいは知的な活動において、「個人の著作権」あるいは「個人の知的財産権」という概念も揺らいでくる。

実際に、ネットにおいては、「ウィキペディア」に代表されるような「集合知」という考え方が支配的になっているように見える。名のある個人が、その人自身で何かを生み出すというよりも、無名の多数の人びとが力を合わせて、何かをつくりあげる。しかも、この場合には、常に“継続中”であって、決して「完成」することがない。つまり、常に「未完成」な状態に物事が置かれる。

したがって、この状況は、「個人」やその「著作権」あるいは「知的財産権」という考え方とは相いれない。

ただし、YouTube などでは、「著作権」の考え方が依然として幅をきかせており、一旦アップロードされた動画が「著作権侵害」を理由に削除される場合が多い。しかし、厳密に言えば「著作権侵害」の場合でも、動画が勝手にアッ

プロードされたが故に、逆に宣伝効果が生じて、無名だった作品が海外でも有名になり、思わぬ利益を得たという事例（『涼宮ハルヒの憂鬱』のアニメ）もある。

10 「リアリティの変質」

ポストモダンとオタク文化に関する見解についての代表的な論者と言うべき東浩紀は、「オタクたちは現実よりも虚構のほうに強いリアリティを感じ、そのコミュニケーションもまた大部分が情報交換で占められている」（東前掲書、136-7 頁）と言っているが、これと同じような趣旨の主張は他の著者にもある。

『キャラ化するニッポン』という著書で「キャラ化」という現象を幅広く論じた相原博之は、「キャラ化」が強まる背景として、香山リカの著書も引き合いに出し、「現実感覚の希薄さ」があり、それ故「多くの日本人たちに、こういった現実との乖離、現実に対する違和感、仮想現実を現実と感ずる感覚が広がっていたとしても、それはむしろ当然と言わざるを得ないのかも知れない」（相原 2007 年、69 頁）とする。キャラ化との関係では、「アニメやマンガ世界の現実」のほうにリアルを感じるという感覚は、今では多くの日本人たちに共通に「身体化」されつつあるのではないだろうか（相原同書、65 頁）と敷衍する。

キャラ化に関しては、確かに現代においてアニメやマンガ世界の「現実」を参照して行動するということはよくある。例えば、日本でも海外ですら、アニメの『キャプテン翼』を見てサッカー選手を夢見ただけでなく、実際に選手になったと公言する例が多い。元世界的テニスプレイヤーの松岡修造は、テニスの試合に常に『エースをねらえ』というテニスマンガ全巻を携えていたという証言もある。

しかしながら、アニメやマンガを参照すること自体は新しいが、メディアの範囲をもっと広げて、小説や物語といった「フィクション」を自己の行動の指針にする、あるいは、それから致命的な影響力を受ける場合があることを考えると、相原が論じているようなことは今に始まったことではないと言える。有名な例では、19世紀に文豪ゲーテが著した『若きヴェルテルの悩み』という小説のなかで、虚構の主人公であるヴェルテルがピストルで自殺するのだが、この小説を読んで、主人公と同じくピストルで自殺を図る人びとが続出した。これを「ヴェルテル効果」と呼ぶが、そういう歴史的事実がある。

そもそも、人間の「リアリティ感覚」自体が、自分の行動範囲を超えた、さまざまな「報告」によって規定されることも、特に近代では増えたが、言語を用いることのできる人類の歴史のなかでは、太古からあったと言うべきだろう。

11 シミュラークル

ボードリヤール(1984年)がポストモダン期におけるキーワードとして挙げた「シミュラークル」は、東浩紀の議論にもキーとなる概念として登場はしている。ただし、それはかなり限定された範囲と意味をもつものとして捉えられている。つまり、東の場合には、「データベース」の諸要素を用いて作られるオタク的な作品の「二次創作」としての意味しかないようなのだ(東前掲書, 84頁)。

しかしながら、ボードリヤールが言うところの「シミュラークル」は、もっと広い適用範囲のある概念であり、ポストモダン期においては、「本物」と「ニセ物」の区別が不分明になり、その中間的な存在である「シミュラークル」が大きな存在感をもつようになるとする。もちろん、東の言うオタク作品の「二次創作」もそこ

には含まれるであろうが、ボードリヤールの言う「シミュラークル」のなかには、「通貨」のような、もっと重要なものも含まれるはずである。つまり、かつては「金本位制」があり、「金」が言わば「本物」で「紙幣」が「ニセ物」と言ってもよかった(ただし、信用の裏づけが必要だった)わけであるが、現在では、「通貨」は実際には、「クレジットカード」を使用する場合のように、信用の裏づけと数値「データ」があれば充分なのであって、まさに「シミュラークル」の状態が支配的なのである。ただ、この例だと、東が言っている「データベース」の必要性を裏づけるものにもなっている。

ボードリヤールが言いたかったのは、ポストモダン期においては、「オリジナル」には似ているが、「コピー」でもなく、ある意味で「オリジナル」や「コピー」を超越した存在であり、「超現実(スーパーリアル)」とも呼んでいい「シミュラークル」が存在感を発揮し優位に立つ、ということであろう。ボードリヤールが挙げている例で一番典型的なのは、「ディズニーランド」であろう(ボードリヤール 1984年, 16頁)。それは、ウォルト・ディズニーが描いたファンタジーの世界のコピーのようであるが、むしろそれ以上の超現実的な存在なのである。

考えてみれば、現代は、「フィクション」がリアルな世界に影響したり入り込む度合が大きくなっている(例えば、映画『踊る大捜査線』のなかの存在であった「湾岸署」がリアルな世界でも作られる)。リアルとフィクションの融合的の中間物も「シミュラークル」と言えるだろう。

12 まとめ

本稿では、ポストモダンを特徴づける要因を7つ挙げた。実際には、もっとあるであろうが、ここでは基本的なものを挙げたつもりである。

これから完成する予定の著書においては、これらの基本要因がいくつか絡むような事例を多く挙げていく予定である。

<文 献>

- 麻生享志 [カダシ]『ポストモダンとアメリカ文化 文化の翻訳に向けて』彩流社, 2011年
- 浅田 彰『構造と力 記号論を超えて』勁草書房, 1983年
- アントニオ・ネグリ&マイケル・ハート『帝国』以文社, 2003年
- ジャン=フランソワ・リオタール『ポストモダンの条件 知・社会・言語ゲーム』小林康夫訳, 水声社, 1986年
- ジョシュア・メイロウィッツ『場所感の喪失』(上) 安川一他訳, 新曜社, 2003年
- マックス・ヴェーバー『官僚制』阿閉吉男・脇圭平訳, 恒星社厚生閣, 1987年
- 若林直樹『ネットワーク組織 社会ネットワーク論からの新たな組織像』有斐閣, 2009年
- ジョージ・オーウェル『1984年』早川書房, (原作: 1949年)
- 鈴木謙介『カーニヴァル化する社会』講談社現代新書, 2005年
- ミッシェル・フーコー『監獄の誕生——監視と処罰』田村俣 [ハヅメ] 訳, 新潮社, 1977年
- ジル・ドゥルーズ『記号と事件——1972-1990の対話』河出書房新社, 宮林寛訳, 1996年
- デイヴィッド・ライアン『監視社会』川村一郎訳, 青土社, 2002年
- 東浩紀『動物化するポストモダン オタクから見た日本社会』講談社現代新書, 講談社, 2001年
- 相原博之『キャラ化するニッポン』講談社現代新書, 講談社, 2007年
- ジャン・ボードリヤール『シミュラクルとシミュレーション』竹原あき子訳, 法政大学出版局, 1984年